

受賞団体

NHK名古屋放送局
「中学生日記」制作スタッフ

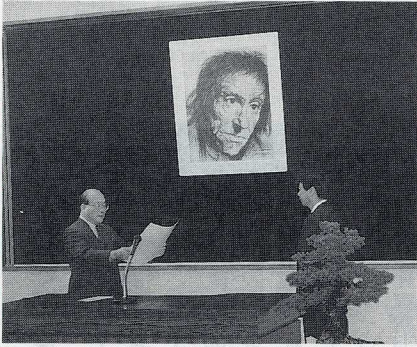
第五回目を迎えたペスタロッチー教育賞の表彰式が、十一月八日(金)教育学部大講義室で開催された。今年度は、NHK名古屋放送局で制作され、毎日曜日に放映されているテレビ番組「中学生日記」のスタッフが、初の団体受賞となった。

表彰式では三百人の出席者が見守る中、原田康夫学長(ペスタロッチー教育賞実行委員長)が「三十五年間にわたって教育の再生を社会に訴え続けてきた功績」を讃え、スタッフを代表して妻城英治郎制作副部長に、表彰状並びにペスタロッチー胸像、副賞を贈呈した。

また、小笠原道雄教育学部長(実行委員)、片岡徳雄広島大学名誉教授(同)からも、ペスタロッチーが当時の困難な教育状況を救済するため、民衆小説というメディアによって真の教育の理念を広く社会に訴えかけたこと、

そしてこのペスタロッチーの精神が、時代と空間を超えて今日的な教育問題に取り組み続けている「中学生日記」に息づいている、との受賞理由が紹介された。

表彰式での妻城制作副部長



第五回 ペスタロッチー 教育賞表彰式

文 坂 越 正 樹

(Sakakoshi, Masaki)
教育学部助教授



記念講演される大久保チーフディレクター

チーフディレクター

大久保氏 記念講演

表彰に続いて、大久保晋作チーフディレクターが、番組制作の背景について記念講演を行った。その中で大久保氏は、脚本が登場する中学生たちの生の体験に基づいていること、配役も素人に近い中学生たちのそれぞれのパーソナリティによって割り振られることを明らかにし、番組制作を通して「名北中学生」を演じる生徒たちが実際に変化、成長していった事例を具体的に紹介した。

「演じている人間が変わり成長するからこそ、番組を制作する意味がある。それがなければ子どもを利用するだけだ」、「大人は社会のひずみをすべて子どもに宿題として与えている」、「今の子どもがどうこうと言う前に、人間らしい人間として子どもの前に立てる大人がどれほどいるか」これらの氏の言葉は、多くの聴衆の耳に残るものであった。

五回を振り返って

ペスタロッチー教育賞は、今日のきわめて困難な教育状況の中で、優れた教育実践を行っている個人あるいは団体を顕彰することを目的として、一九九二年に創設された。広島大学教育学部とペスタロッチー教育賞実行委員会の主催で、財団法人広島地域社会研究センターと中国新聞社の後援を受けている。

賞の名称に冠されたペスタロッチーは、十八世紀から十九世紀にかけて、スイスで活躍した民衆教育の父と呼ばれる教育思想家、実

践家である。彼は多くの困難の中で常に子どもへの愛情を失うことなく、真の教育の原理を模索し続けた人物で、今日にいたるまで世界の教育の原点とされている。このペスタロッチーの名が、現代の混沌する教育に立ち向かう優れた実践を顕彰し、光をあてる教育賞のシンボルとなったのである。

第一回受賞者として、宮城まり子ねむの木養護学校長に贈呈されて以来、第二回は谷昌恒北海道家庭学校長、第三回は児玉三夫明星学苑理事長、第四回は山田洋次映画監督、そして今回にいたっている。

回を追うに従って、この賞が学内外に定着しつつあることは、主催側のひいき目ばかりではないように思われる。広島大学の対外的事業として一定の役割を果たしていることは、全国規模の推薦があることや、各回の受賞者発表の際の反響からもうかがえる。また、受賞者がこの賞の趣意に賛同され、受賞を大きな喜びとされていることも望外のことであった。その結果、毎回の受賞者が来学され、大勢の聴衆を前に教育の原点を示す記念講演を行ってくださっている。聴衆の中には地域社会の人々や、とりわけ教育問題を真摯に考えようとする多数の学生たちが含まれており、その影響力は計り知れない。

第五回の節目にあたり、このペスタロッチー教育賞が、今日の教育にとつての「地の塩」になろうという賞創設の趣意を想起し、次回以降それがさらに浸透、発展するよう心を新たにしているところである。